2023 年 1 月 14 日（土）
第 30 回加藤周一文庫公開講読会「『羊の歌』を精読する」@立命館大学　平井嘉一郎記念図書館

「内科教室」

報告者：西澤忠志

1. 梗概

本章は、加藤周一が 1943 年から 44 年までの、東京帝国大学医学部卒業後、医局に勤めていた 24 歳から 25 歳の時期に、彼が「身近」な存在、「疎遠」な存在と感じた人々とのかかわりが対比的に綴られている。まず、医局の中で「身近」な存在として挙げられているのは、医局の先輩である中尾喜久と三好和夫である。中尾と三好は加藤が幼少期から慣れ親しんでいた「科学」的な考えを徹底し、観察を通じて慎重に事実を推論し、その対象を見抜くという方法を実践していた。こうした方法は、後の加藤が、ものごとを見る際の方法にも応用されることとなる。逆に「疎遠」と感じていた人が、「若い医者」である。彼との太平洋戦争の局面に対する見解をめぐる言い争いを通じて、加藤は自身の「いくさ」に邁進する同時代の日本社会への憤りを自覚するとともに、時と場合によって科学的な態度が豹変してしまう「知識人」の非一貫性に対する疑問を生むこととなった。この「身近」と「疎遠」との間にいたのが、「看護婦」と医局の外にいた人々である。加藤は「看護婦」との交友を通じて、当初は彼女に興味（好意）を持っていたが、それが彼の内部を変えることはなかったため徐々に疎遠になった。また加藤は、同時代の医局の外にいた人々とは、当初は隔たりを感じていた。しかし、東京大空襲での治療をきっかけに人々とのつながりを感じた。しかし、彼ら／彼女らとのつながりも一時的なものでしかなかった。戦中を通じてつながりを保っていたのは、加藤と思想を共有するごく一部の限られた人々であった。

2. 全体の構造

- 「二章ごとに関連のある話題が取り上げられている」という視点に従えば、

・「内科教室」…東京での体験
・「八月一五日」…軽井沢での体験
　→いずれも、**「近い」人々との交友、それ以外の人々との距離感**

- 『朝日ジャーナル』版との異同はほとんどなし…連載された時点からすでに「完成」された章
- 書誌情報

『朝日ジャーナル』9 巻 14 号〔1967 年 4 月 2 日号〕（1967）122-126 頁
『羊の歌』（旧版）200-211 頁、（新版）227-239 頁

※凡例
・以下の略字を使用する
「e.g.」…例えば、「∴」…ゆえに、「∵」…なぜなら、下線部は発表者によるもの
・今回、本文の後の説明の際、「３つの視点」をもとに整理する
① 「当時」の加藤周一（物語内の時代的文脈）
② 執筆当時（1967 年）の加藤周一（書かれた時代の文脈）
③ 現在の我々からの視点（加藤周一全体の活動から見た解釈）

3. まとめ

第 1 パラグラフ（旧版頁 200-201、改版 227 頁）

> 東大附属病院の内科教室は、私に実験科学への興味をよびさました。私が無給の副手として内科教室へ入ったときに、教室の医者の数は、新たに加わった私の同期生も含めて、名目上は、五十人を越えていたろう。しかしその多くは、卒業と同時に軍医として召集されていたから、実際には二十人ばかりが、医局――と病院の医者の部屋をよんでいた――に残っていたにすぎない。教授・助教授・講師・外来医長が一人ずつ、助手が四、五人、のこりが副手であった。将来必要があれば、市内の病院で働き、暮せるだけの稼ぎはできるだろう、と私は考えていたが、定った計画をもっていたわけではない。いくさの見透しがたたなかったから、将来の計画のたてようもなかった。家産はすでに傾いていたが、さしあたり稼がなくても、暮してゆくことはできた。

① 「当時」の加藤周一

● 同時代的背景①…戦時中の医学界[1]

・1941（昭和 16）年…医療関係者徴用令によって、国家総動員法に基づく医師の強制動員が可能に

→国内の医師不足・空襲のため、病院や診療所が減少

● 同時代的背景②…戦時中の東京帝国大学医学部

・1939（昭和 14）年…帝大・医科大学に修業年限 4 年（実際には 3 年半）の臨時付属医学専門部が設立

∵戦局拡大からより多くの軍医が必要となり、短期間で養成するため[2]

・軍事教練の開始

・1941（昭和 16）年…修業年限の短縮（3 か月→6 か月）

e.g., 1938 年 4 月入学者…1941 年 12 月末に卒業（通常は 1942 年 3 月卒業）

→不完全な医学教育となる[3]

特に臨床の講義・実習が大幅に縮小（代わりに、医局が教育機関となる）[4]

→学徒動員、勤労動員はほとんどなかったが、卒業後次々と召集されたため、診療医が不足[5]

● 同時代的背景③…太平洋戦争で日本軍の負けが続く[6]

・主な日本軍の流れを挙げてみると…

1 月 2 日　ニューギニア島ブナの日本軍全滅

2 月 1 日　日本軍、ガダルカナル島撤退開始

4 月 18 日　連合艦隊司令長官山本五十六、前線視察途中ソロモン群島上空で戦死

5 月 12 日　アメリカ軍、アッツ島に上陸、29 日、日本軍守備隊全滅

11 月 21 日　アメリカ軍、ギルバード諸島のマキン・タラワ両島に上陸、25 日、両島の日本守備隊全滅

---

[1] 杉山章子「戦時体制下の医療」『日本医療史』吉川弘文館（2006）271-276 頁

[2] 『東京大学医学部百年史』東京大学出版会（1967）199 頁

[3] 上同、200 頁

[4] 「鉄門倶楽部の歴史」『鉄門倶楽部創立百周年記念誌』東京大学医学部鉄門倶楽部（1999）85 頁

[5] 『東京大学医学部百年史』東京大学出版会（1967）204 頁

[6] 「1943 年〈昭和 18　癸未〉」『誰でも読める　日本史年表』, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com , (参照 2023-01-06)

● 1943 年当時の加藤周一

・1943（昭和 18）年 9 月…東京帝国大学医学部（血液学を専攻）を繰り上げ卒業、医師免許取得
佐々内科（主任、佐々貫之[7]）に無給の副手[8]として入局

・当時の佐々内科…内科学の各領域で活躍することとなる人材を輩出[9]

e.g., 大島研三…腎臓病と動脈硬化の研究、近藤台五郎…胃カメラ、小林太刀夫…循環器系の研究 etc.

・東大医学部でも出身者が軍医として出征し、戦死者も出ている

e.g., 加藤の同期生（昭和 18 年卒業）…18 人が戦死[10]

⇒加藤にとって、「いくさ」が身近な存在になった時期

∴「教室の医者は 50 名から 20 名が残っていたにすぎない」…本来ならば、もっといるはず…

・同時期の加藤の暮らし…祖父（熊六）の代から家計が苦しくなる

c.f.「美竹町の家」

・混迷を深めていく戦争の状況とのリンク…「いくさの見透しがたたなかったから、
将来の計画のたてようもなかった。」

② 執筆当時の加藤周一

・すでに「医業を廃していた」時期に執筆（ブリティッシュコロンビア大学に赴任中）

・インターン廃止に関わる東大紛争期（1965-68)、特に 67 年は無期限授業放棄（1 月-5 月）など

※68 年…安田講堂を占拠

→加藤の東大紛争に関するコメントは見当たらないため、関連は不明

③ 現在の我々からの視点

・徐々に、生活が厳しくなっていく過程

---

[7] （1890-1984）東京帝国大学卒業。1941 年東京帝国大学教授。退官後、関東逓信病院院長。
『日本近現代医学人名事典 ：1868-2011』医学書院（2012）288 頁

[8] 旧制大学で、助手の下にいて研究室の仕事や研究の補助の役をする人。教務補佐員。
「副手」『デジタル大辞泉』 JapanKnowledge, https://japanknowledge.com , (参照 2022-12-20)

[9] 新城之介「私の恩師――佐々貫之先生」『臨床科学』21 巻 6 号（1985）813 頁。

[10] 東京大学医学部戦没同窓生追悼基金『春来たり花は咲けども』東京大学医学部戦没同窓生追悼基金（2001）11 頁

第 2 パラグラフ（旧版 201-202 頁、改版 227-229 頁）

医者の世界は、珍しいものではなかった。私は子供の頃から、白衣や、薬の棚、消毒液の匂いや聴診器の冷い肌触りに慣れていた。しかしそれだけではない。確かな事実にもとづいて結論できることだけを結論し、検証することのできないすべての判断を疑う――というものの考え方そのものが私にとって新しいものではなかった。医学の――つまり実験科学の世界へ入ってゆこうとしたときに、私が出会ったのは、新しい考え方ではなく、慣れ親しんできた考え方の自覚、研究室での研究室での実践、実践を通してのその考え方の徹底ということであった。教室で血液学を専攻していた二人の先輩は、その意味で厳格であった。熟練を尊重し、測定の誤差範囲が一定した数字でなければ信用せず、しかもあたえられた事実から推論するときには慎重を極めていた。「それだけの事実から、そういう結論は出ないね、そうであるかもしれないが、確かにそうだといえない」と中尾（喜久）さんはいっていた。「自分で測りなおさなければだめだ」と三好（和夫）さんはいった。「誰の数値でも、それをもとにしてものがいえると思ったら、大まちがいだぜ」。私はこの二人の先輩から、血液学一般の手ほどきを受け、殊に血液や細胞の形態学を習ったのである。戦後パリ大学医学部の専門家と共に、診断の面倒な標本を同じ顕微鏡で何度か覗いたときにも、血液細胞の形態学で私が新たに学ばなければならないことは、ほとんどひとつもなかった。三好さんは、医局の当直室に患者用の寝台をひとつもちこみ、泊りきりで深夜まで仕事をしていた。私が当直の日に、夜の病室を廻った後で、研究室へ行ってみると、三好さんの机にだけは電気がついていて、文献を積みあげて読んでいたり、標本をならべて顕微鏡を覗いていたりした。湘南にあった自宅へは、洗濯ものの風呂敷包みを下げて、週末に一度帰るだけであった。痩せて、小柄な人の、どこにそれほどの活力があったのか。たしかに学問と研究室そのものをたのしみとしていたのである。中尾さんは血液学ばかりでなく、自律神経系に関する冲中助教授の実験的研究も手伝っていて、内科学一般に実に広い知識をもっていた。質問をすれば知らないことがなかったし、私が一面的な思いつきを話せば注意深く聞いて、足りない面を補ってくれた。周囲の人間を見ることには鋭く、敗戦直後の混乱のなかで、日米合同の原爆医学調査団に加わり、広島へ行ったときにも、日本側はもとより米国側の人物をも、忽ち見抜いていた。

① 「当時」の加藤周一

● 加藤の「科学的」な態度を「徹底」していく（「初めて学ぶ」、「入る」ではない）

∵「医者の世界」に既にいたから

・「医者の世界」とは何か？

I. 生まれに関わるもの…父親が医者であり、彼を通じて医学に関係した物や人々と知り合う

「私は子供の頃から、白衣や、薬の棚、消毒液の匂いや聴診器の冷い肌触りに慣れていた。」

c.f. 斎藤茂吉との出会い

1940 年代の初めに私は一度だけ斎藤茂吉に会ったことがある。私は医学生で、夏休みの実習をどこの病院ですることも学生の自由であったから（……）青山脳病院に斎藤院長を訪ねて相談することを思いついたのである。歌集を読んでいたということもあり、父が高等学校と大学の医学部での同級生であったということもある。そこで歌の話はしなかったし、実習のためには結局他の病院へ行くことにしたのだが、その印象は長く私のなかに残った。（……）高名な歌人斎藤茂吉は、東北の訛の強い言葉を話す田舎の好々翁という感じの人で、飾らず温かい、親切な態度で、見ず知らずの青年を遇してくれた。「おお、加藤君の息子さんか」という風に、院長室での会話は始まった、

と思う。大学以来ほとんど接したことのない、しかし名前は覚えている昔の同級生の息子、ということはほとんど全く係りのない青年を、多忙をきわめていたにちがいない時間を割いて引見し、しかもそこに一種の温かさが滲み出てくるようなし方で相手にすることのできるような人物で、茂吉はあった[11]。

→しかし、印象だけが残るだけで、感銘を受けたわけではない
人だけではなく、医学に関するものに触れた時も同様？

II. 父親を通じて、実証主義的な考え方に慣れ親しんでいたから[12]
「確かな事実にもとづいて結論できることだけを結論し、検証することのできないすべての判断を疑う――というものの考え方そのものが私にとって新しいものではなかった。」
c.f., 「病身」…父が加藤に「実証的なものの考え方」を伝える[13]

→父親を通じて修得した自分の生活・思考スタイルに近い世界（「医者の世界」）⇔同世代の人々の世界[14]
⇒「入る」ではなく「徹底」していったことは、医学者としての道を断念した父との違いにもなる
e.g., 戦前社会に対する認識…父：孤独と不満からの「天皇」「日本」への崇拝、一面的な社会批判[15]
加藤：家族・友人との連帯、多面的な社会批判（e.g., 「言葉と戦車」）
・ほかにも、文学に対する意見の相違 etc.

● 中尾喜久と三好和夫との出会い

中尾喜久（なかお-きく、1912-2001）
・略歴[16]
1937 年：東京帝国大学卒業、第 3 内科入局
1947 年：講師
1957 年：群馬大学教授
1963 年：東京大学教授
1972 年：自治医科大学学長
・著作…編著『血液細胞の分化と増殖 ： 基礎と臨床』（1972）

※中尾喜久（医学博士）
（https://www.youtube.com/watch?v=fwmcaYS1riQ）
・1940 年代の中尾喜久

---

[11] 加藤周一「斎藤茂吉の世界」『近代の詩人 3』潮出版社（1993）〔鷲巣力編『加藤周一著作集 17 日本の詩歌・日本の文体』平凡社（1996）、189-190 頁。
[12] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店（2018）48-50 頁
[13] 「病身」『羊の歌』47 頁
[14] 上同、50 頁
[15] 上同、53 頁
[16] 『日本近現代医学人名事典 ：1868-2011』医学書院（2012）432 頁

佐々内科の副手として在籍[17]
冲中重雄[18]を中心とする迷走神経[19]の共同研究に参加
→「自律神経機能、心身連関の根幹をなし、その失調は失神やてんかんといった意識障害とも関連（……）
　迷走神経は人体の機能や疾患と多様な関わりをもつ[20]。」
∴内科に関する多くの知見が必要？

三好和夫（みよし-かずお、1914-2004）
・略歴[21]
1939 年：東京帝国大学卒業、第 2 内科入局
1944-1946 年：海軍に軍医として徴用され南方へ[22]
1947 年：助手
1955 年：第五福竜丸事件による被爆者の主治医
1957 年：徳島大学教授、附属病院長
1980 年：武田医学賞（免疫グロブリン病並びに筋ジストロフィー[23]症に関する研究）
・1940 年代の三好和夫…筋ジストロフィーの研究に従事
e.g.,「進行性筋ヂストロフィー症の遺伝生物学的並びに臨床的研究」『精神神経学雑誌』48 巻 1 号（1944）
　・190 名の患者を対象とした調査・再調査[24]により、筋ジストロフィーの発症と遺伝との関わりを探る
　・「本数字の解釈」…研究の結果で出た数値を、他の研究との比較を通じて、その意義を考察[25]
⇒一定の方法論に基づく臨床研究[26]を行う
→「慣れ親しんできた考え方の自覚、研究室での研究室での実践、実践を通してのその考え方の徹底」
② 執筆当時の加藤周一

---

[17] 医学業績研究会『血液診断 ： 各科領域』敬文社（1943）40 頁
[18] （1902-1992）東京帝国大学卒業。講師、助教授を経て東京大学教授。自律神経系の研究を行い、神経病理学の確立に努力し、内科の専門分化を主張、神経内科を提唱。病理解剖を重視した。
『日本近現代医学人名事典 ：1868-2011』医学書院（2012）145 頁
[19] 感覚と運動の両神経を含む、首を通って内臓諸器官・皮膚・筋肉などに分布する神経
「迷走神経」『旺文社　生物事典』 JapanKnowledge, https://japanknowledge.com , (参照 2022-12-26)
[20] 「特集　迷走神経の不思議」『BRAIN and NERVE』74 巻 8 号（2022）https://www.igaku-shoin.co.jp/journal/detail/40048#tab1（確認 2023 年 1 月 10 日）
[21] 『日本近現代医学人名事典 ：1868-2011』医学書院（2012）606 頁
[22] 三好和夫「加藤周一君のこと」『加藤周一著作集　月報 5』平凡社（1979）7 頁
[23] 「筋肉それ自体に遺伝的な問題があって筋肉が萎縮し、筋肉の力が弱くなる疾患の総称。」
海老原進一郎「進行性筋ジストロフィー」『日本大百科全書（ニッポニカ）』
[24] 三好和夫「進行性筋ヂストロフィー症の遺伝生物学的並びに臨床的研究」『精神神経学雑誌』48 巻 1 号（1944）12 頁
[25] 上同、20-22 頁
[26] 病気の予防・診断・治療方法の改善や、病気の原因の解明、患者の生活の質の向上などを目的として行われる医学研究で、人を対象とするものをいう。
「臨床研究」『デジタル大辞泉』JapanKnowledge, https://japanknowledge.com

● 戦後も彼らとの付き合い

e.g., 1948 年開催の第 7 回日本医学放射線学会の帰りに話し合う[27]

広島の原爆調査に参加

・1951-1955 年…血液学の研究を目的にフランス滞在した際、パリ大学医学部、パスツール研究所、キュリー研究所に所属

「戦後パリ大学医学部の専門家と共に、診断の面倒な標本を同じ顕微鏡で何度か覗いたときにも、血液細胞の形態学で私が新たに学ばなければならないことは、ほとんどひとつもなかった。」

→彼らの方法が、別の大学でも通じる「普遍性」を持ったものだった

● Q.「血液学」の中でも特に「形態学[28]」を挙げたのか？…加藤周一と「形態学」

e.g., 「木下杢太郎[29]の方法」(1949) ＝「形態学」的方法

・加藤周一の「形態学」理解[30]

・レオナルド・ダ・ヴィンチに始まる、「単に観察と記述との仕事ではなく、方向をもった観察と秩序ある記述との仕事」(その根拠が自然にあるのか、精神にあるのかは未解決)

・木下杢太郎に「皮膚疾患の無数の形態に秩序を求め、多くの場合の彼方にそれらの特殊な形態の原型を追及した生涯を通じて変わらない情熱」を想像

・「形態学的方法の原理を与えた」ゲーテは、「原型」が自然に属するか、精神に属するかより、見ることに関心を持つとする

・「実証主義の最初の表現の一つ」であり、「近代科学の武器」としての「形態学」

(多数の形態→「原型」(＝秩序) を見出す過程が？)「詩的直観」との類似

⇔「精神の表象する自然の中に、精神が自己の秩序を見出す合理主義」

数学、数学的科学ではなく形態学 (＝皮膚科学、植物の写生)
音楽ではなく造形美術 (＝大同石仏に関する評論)
精神活動全体から文学をみる (＝短歌、森鷗外論)
} 木下杢太郎の一貫した精神

→「精神」(＝「秩序」) によって物事を判断する「合理主義」(演繹的) とは異なる、「詩的直観」とつながる「形態学」的方法 (帰納的)

⇒父親由来の「合理主義」からの脱却の方法としての「形態学」

---

[27] 「AVRIL le 3 samedi」『JOURNAL INTIME 1948 1949』(1948)
(https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/viewer/mp000382/note_n09/?p=13)

[28] 「形または構造の記述と法則性を探究する生物学の基本的な一分野。形態学とは本来、形成および転成の学という動的な概念に対してゲーテが名づけたものである。現在の形態学は研究の対象により、細胞学、組織学、器官学、解剖学などとよばれる。」
小林靖夫「形態学」『日本大百科全書 (ニッポニカ)』

[29] (1885-1945) 詩人、劇作家、小説家、美術研究家、医学者。第一高等学校より東京帝国大学医学科に進み、皮膚科を専攻。初め『明星』に寄稿、ついで「南蛮詩」をつくり、『方寸』『屋上庭園』『スバル』の中心となる。森鴎外の影響を強く受け、医学研究と文学活動の両面に深くかかわった。幅の広い、高踏的な知識人文学者の典型。
紅野敏郎「木下杢太郎」『日本大百科全書 (ニッポニカ)』

[30] 加藤周一「木下杢太郎の方法」『文芸往来』1 巻 3 号 (1949)〔『加藤周一自選集 1』岩波書店 (2010) 208-209 頁〕

フォション『形の生命』などを根拠としつつ、仏像など美術をみる際の方法にも用いられる

e.g.,「仏像の様式」(1967)…内容を「形態学的特徴(=「様式」)」を叙述するものとする[31]

仏像彫刻の様式の変化を、日本特有の事情を考慮しつつ、「アルカイズム、古典的段階、洗練とアカデミズム、バロック」に整理…ヨーロッパ彫刻の様式変遷と共通した「発展法則」[32]

③ 現在の我々からの視点

- 加藤の「形態学」的な美術への見方は、『日本　そのこころとかたち』に結実

→「かたち」への注目(具体的なもの→内容へ注目)

- 自身のものの見方の基礎としての「臨床医学」の経験の自覚

臨床医学と文学とは私の中でどう関わっていたか。直接に関わることはなかった。(……)しかし研究室での経験が私の文筆業に影響しなかったわけではない。事実の尊重と合理的な推論の習慣は私の作品のすべてに及んでいると思う[33]。

事実を尊重することと+合理的な推論(演繹的な「合理主義」ではない?)

⇒加藤のものの見方の基礎としての「形態学」、延いては三好・中尾から教わった血液学の知見

第3パラグラフ(旧版202-203 頁、改版229-230頁)

> 軍医の召集は、大学病院の医局員の数を、いよいよ少くし、残った医者がひとりで受けもつ入院患者は、四人から六人になり、六人から八人になった。私は病室の仕事には慣れてきたが、受け持ちの患者も殖え、研究室の仕事も加わったので、病院を引き上げて世田谷の家へ帰るのは、次第に晩くなった。同時に、片道一時間半の毎日の往復は、次第に重い負担となり、遂に三好さんにならって病院を探して泊りこむことを考えた。それは私だけではなかった。はじめのうち私たちは空いている病室を探して泊っていたが、その後東京の交通はいよいよ不便になると共に、二等病室の一部を泊りこみ用にあてることが、医局の暗黙の習慣となった。食事は病院の構内の食堂ですませていたが、夜おそくなると、空腹を感じた。泊りこみの常連は、その日の当直の医者も加えて医局に集り、大豆を妙って、番茶を飲んだ。米はもとより、芋さえも、手に入れることが困難になっていたからである。しかし動物実験はつづけられていたので、うさぎを殺したときにはうさぎを、犬を殺したときには犬を、大鍋で煮て「宴会」をした。犬の肉は煮ると泡が出るから、その泡を掬って捨てれば、馬肉の程度には食べられるものだ、と誰かがいい出し、私たちは夜おそく、犬鍋をかこんで、病人や実験や病院のなかの身辺雑事を談じ、冗談をいって賑かに笑っていた。話がいくさに及ぶことは少かった。しかしそういうことが全くなかったわけではない。

① 「当時」の加藤周一

- 病院数の減少に伴う、一極集中化…受け持ち患者の増加、多忙化

---

[31] 加藤周一「仏像の様式」『芸術論集』岩波書店(1967)〔『加藤周一自選集4』岩波書店(2009)19頁〕

[32] 三浦篤「『日本その心とかたち』再読」『加藤周一を21世紀に引き継ぐために:加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム講演録』水声社(2020)181-182頁

[33] 加藤周一「私は何をしてきたか」『鉄門倶楽部創立百周年記念誌』東京大学医学部鉄門倶楽部(1999)163頁〔『加藤周一自選集10』(2010)40頁〕

● 二等病室での暮らし

・1940 年代の「二等病室」の描写

南地階から廻診がはじまつた。ここの病床は三等病室と施療病室である。(……) 大きな部屋を二つに区切り各百個の別途を五十づつに分けて並べたのが三等、施療の病室である。二等病室は一階、二階にある。これは独立した部屋であるから、隣の患者とめったに顔を合わせる機会がない。三階は一等、特等病室。これは相当豪勢である。(……) 地階、一階、二階、三階と人生そのままの生活が、それぞれの病苦と闘いながら営まれているのである[34]。

● 食料供給率の低下[35]

・食料増産のための政策が進められる

例：制限農作物（桑、茶、ハッカ、たばこ、果樹、花卉）の作付を制限・禁止

主要な食料農作物（稲、麦、さつまいも、じゃがいも、大豆）の作付命令

・1941 年・42 年頃：食料供給率が急落、農家を売り手とする闇市場

∵軍需生産に重点が移ったから…配給制・切符制を行うも国内の「モノ不足」が深刻化

「米は一日二合三勺であった。当時のアルバムを見ると如何に栄養が不足していたかがよく分かる[36]」

※2 合 3 勺＝330g、一食あたりのご飯の目安は 235～265g

・1945 年：食料供給率が激減

∵徴兵と徴用による働き手の不在、朝鮮・台湾からの移入米の途絶、闇市場への流出

・「献納」された犬、ウサギなどの動物を食肉とする

● 戦時中に医学者たちの生活

・どのような会話をしていたのかは不明

しかし、医学教育は従前どおり行われる

・「私たちは夜おそく、犬鍋をかこんで、病人や実験や病院のなかの身辺雑事を談じ、冗談をいって賑かに笑っていた。話がいくさに及ぶことは少かった。しかしそういうことが全くなかったわけではない。」

→専門以外での無関心[37]

∵「社会の動きと関係の深い学部ではなかった」ため、ファシズムに賛成も反対せず話題にも出さない[38]

② 執筆当時（1967 年）の加藤周一

・医学と社会との関係…特に触れず

・しかし、医者の仕事と文学者の仕事とは相反するものではなく、補完し合うものと考える

---

[34] 八野井実『永遠の科学者』大新社（1942）31 頁

[35] 木村茂光『日本農業史』吉川弘文館（2010）330-331, 338 頁

[36] 塩見勉三『鉄門倶楽部創立百周年記念誌』東京大学医学部鉄門倶楽部（1999）82 頁

[37] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」になったのか』岩波書店（2018）251 頁

[38] 加藤周一『過客問答』かもがわ出版（2001）125 頁

e.g.,「医者の仕事と文士の仕事」(1957)

文士であることは、医者の世界に捉われないために役立ち、医者であることは、文士の世界に捉われないために役立つ。(……) 学問としての医学には、またものごとを厳密に考える上での訓練という意味もある。しかし医学(の研究)に用いられる人間の精神的能力は、限られた一面にすぎない。文士の業はその他の面をもっと広く活動させる可能性を与える[39]。

③ 現在の我々からの視点

・戦時下の生活での多忙化、物資不足を示す

・「二等病室」に泊まること…贅沢でもなく貧乏でもない、中間にいたこと?

・医者と社会との関係について…社会参画については触れていない?

「医学」を含む「科学」と社会との関係性に重きがある?

[39] 加藤周一「医者の仕事と文士の仕事」『自然』12 巻 9 号(1957)40 頁

第 4 パラグラフ（旧版 203-205 頁、改版 230-232 頁）

ある晩、私たちは、米軍がまた日本軍のまもる一つの島に上陸したという報道を聞いた。「断乎敵を粉砕する」と、その報道はつけ加えていた。「そうはゆかないだろう、どうせまた米軍が占領するのだろう」と私は呟いた。そう呟いても誰もとり合わずに、話はそのまま身の廻りのことに移ってゆくのがいつもの慣わしでもあった。しかしその晩当直して犬鍋の宴会に加わっていた若い医者は、私の言葉にこだわった。「どうせまた、とは何ですか」と思いがけなく激しい声で彼はいった。「情報局が、断乎敵を粉砕するといったのは、今日がはじめてではないからさ」と私は話を打切るつもりで応じた。しかし相手はひき下らなかった。「けしからぬではないですか、どうせ敵が勝つだろうというのは」「そうだろうか」と私はいった。「そうだろうかじゃない、今、米軍がまた占領するだろう、といったばかりでしょう」「もちろん、そういったさ。それで君が怒ることはないだろう。今まで米軍が太平洋の島に何度も上陸して占領に成功しなかったことは一度もない。とすれば、今度の上陸も、失敗の見透しよりは、成功の見透しが大きかろう」「そうとはかぎらない……」と相手はいった。「確かに成功するとはかぎらない、明日のことは確かにはわからない、しかし米軍が占領に失敗するだろうと想像するための材料はない。成功するだろうと考える材料だけが多いということだ」「あなたという人は、必勝の信念が……」「……あってもなくても、これは信念の問題ではない。客観的な状況判断の問題にすぎない」「敗北主義だ」と彼は叫んだ。「ちょっと待ち給え」と私はできるだけ興奮を抑えていった、「ぼくは島の日本軍がおそらく敗北するだろう、といったので、敗北することが望ましい、といったのではない。その二つは、全く別のことだ。敗北することが望ましい、といったとすれば、精神的な裏切りで、敗北主義かもしれない。しかし敗北しないことがどれほど望ましくても、その望みと、おそらく敗北するだろうという判断とは、全く関係がない。病人に癒ってもらいたいという願いと、その病気がおそらく癒るだろうか癒らぬだろうかという判断とを、はっきり区別できなければ、そもそも医学は成りたたない…」「病気と戦争はちがいますよ」と相手はいった。「いや、ぼくの比較のかぎりでは、少しもちがわないね」と私はつづけた、「病気と戦争がちがう位のことは、わかり切っている、しかしそのちがいのために、事実判断と価値判断との区別が、一方で必要で、他方で不必要になるということは決してない。その程度のことさえはっきり考えられないで、学問はできないよ。信念だの敗北主義だのと、そんなことは軍人がうんざりするほどいっている。大学は学問をするところだ、学問にとって信念などはびた一文の値うちもない。われわれは、どういう事実を知っているか、上陸した米軍の兵力も、島の日本側の兵力も、われわれにはわからない。われわれの知っている事実は、太平洋の小さな島に米兵がすでに何度も上陸し、上陸して占領しなかったことは今までに一度もなかったということだけだ。それだけの事実から、今度の上陸の成功と失敗のいずれが、より確からしいと判断できるか。ぼくは米軍が確かに成功する、とは決していわなかった。おそらく成功するだろう、といったのだ。そのどこにまちがいがあるのか。それが情報局の気に入らぬだろうというのならば、話は別だ。はっきりそういったらいいじゃないか。ただ情報局をかさに着て、いいがかりをつけるのはよせ。敗北主義だの何だのと、馬鹿々々しくて聞いちゃいられない。よくもその程度の頭で……」

① 「当時」の加藤周一

- 当時の日本軍…（先述）
- 「若い医者」との論争…事実かどうかは不明

● 「若い医者」との論点…日本の戦局に対する評価

・加藤…「太平洋の小さな島に米兵がすでに何度も上陸し、上陸して占領しなかったことは今までに一度もなかった」という一連の「報道」から

・若い医者…報道（＝「情報局[40]」）の情報に基づき、「必勝の信念」を重視

※事実には注目せず

→方法として「科学的」態度をとらない

⇒研究と思想との矛盾…「病気と戦争がちがう位のことは、わかり切っている、しかしそのちがいのために、事実判断と価値判断との区別が、一方で必要で、他方で不必要になるということは決してない。」

・太平洋戦争中の報道…軍部の検閲により、大本営と同盟通信が情報と報道を独占

軍に都合の良い情報しか流れなくなる[41]

違反すれば紙の配給停止や発行停止処分を受けることから、新聞社は従う

・戦局が悪くなると、それにも関わらず威勢のいいことを言う新聞への不信に

e.g., 清澤洌『暗黒日記』

昭和二十年四月十七日（火）

沖縄の戦況が絶望的であるのは、誰も知っていることだ。が、新聞はまだ「神機」を言っている。無論、軍部の発表によるものだ。しかし、国民は信じまい。だれも信じないことを書いているのが、ここ久しい間の日本の新聞だ[42]。

∴事実の部分（一つの島に上陸した）と、希望の部分（「断乎敵を粉砕する」）を分け、事実かどうかを解釈したうえで判断する必要

e.g., 清澤洌『暗黒日記』…台湾沖航空戦の報道に対する反応

十月十七日（火）

神嘗祭である。各新聞は台湾沖の戦果を伝え、大本営も十六日十五時これを発表す。この戦果につき、小磯首相は談話を発表し、「ことに今回の戦闘に陸軍の雷撃機隊も参加し、この戦果をあげたことは、特筆大書さるべきことである」といっている。国家存亡のときに当り、陸海軍が一緒に戦争をすること

---

[40] 1940 年 12 月に発足したファシズム的マス・メディア統制のための国家機関。第一部は企画調査、第二部は新聞、出版、報道の指導取締り、第三部は対外宣伝、第四部は出版物などの検閲取締り、第五部は映画、芸術などの文化宣伝を、それぞれ担当した。このうち、とくに第一部、第二部の部長、情報官には軍人が配置されて主導権を握り、一方では言論界の人間を動員して官民一致の態勢をつくりあげ、太平洋戦争期には「世論指導」に威力を発揮した。しかし、大本営報道部は存続し、内務省警保局検閲課との間では兼官制度を敷くなど機構の実質的一元化は達成されず、ために数次の機構改革が行われた。一元化が完成したのは敗戦直前の 45 年 5 月で、年末には機構そのものが廃止された。
北河賢三「内閣情報局」『日本大百科全書（ニッポニカ）』, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com , (参照 2022-12-26)

[41] 貴志俊彦『帝国日本のプロパガンダ』中央公論新社（2022）158 頁

[42] 清澤洌『暗黒日記』〔「青空文庫」https://www.aozora.gr.jp/cards/000910/files/60326_73215.html〕

が、どうして特筆大書すべきことなのか。こんなことを総理大臣が言わねばならぬことが、特筆大書すべきことであろう。

この戦果につき問題は、(一) 日本側の損害は、発表に一切ふれていない。(二) 敵の発表は日本側の損害を巨大に伝えていることである。将來、この辺の事情が明らかになろう。

→挙国一致を唱えながら、戦局が悪化している時でさえも連携のとれていない陸海軍への皮肉
発表は日本側の損害に触れていないこと、敵の発表が損害を大きく伝えていることから、

● 『ある晴れた日』にも同様の言い争いを描写
・「若い医者」→先輩医師、激しく論駁→やんわりとしたもの[43]
※意図したところは次のパラグラフにて説明

② 執筆当時（1967 年）の加藤周一
● 医学部など、同時代の学生の政治への無関心は、「戦争と知識人」でも言及

筆者の知っていたかぎりでの東京帝国大学医学部及び文学部の学生の大多数は、「政治に無関心」であった。ということは、みずから検討することなしに、戦争宣伝の新聞記事をそのまま鵜呑みにしていたということである[44]。

→論争で見られたような事実と判断との混同は、戦時中の「知識人」にも共通の問題とする

科学的精神の欠如は、一般に、いくさの間日本の知識人の圧倒的多数に、めだったことである。事実の問題と党委の問題とをはっきり区別することさえ、たちまちできなくなり、論理学の初歩さえ混乱してしまった。それは論理的な思考さえもが、日本の知識人に薄弱ということではない。日本には学問があったし、今でもある。そういうことではなくて、科学的な、あるいは論理的な思考さえもが、日本の知識人にとっては、時と場合に応じて放棄し得るものだということである[45]。

③ 現在の我々からの視点
・「知識人」の「思考と行動の一貫性」は、加藤の一貫して注目したテーマの一つとなる
e.g., 『20 世紀の自画像』(2005)

医者としては、自分がこの患者に治ってもらいたいと思う希望と、この患者が適切な治療をすれば実際に治るかどうかというのは、別の二つの問題です。それを区別できなければ、医者とは言えないし、もちろん科学者とも言えないわけです。医学も科学ですから。客観的に二つのことを区別しなければならない。

---

[43] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」になったのか』岩波書店（2018）255 頁
[44] 加藤周一「戦争と知識人」『近代日本思想史講座　第 4』筑摩書房（1959）〔『加藤周一自選集 2』岩波書店（2009）399 頁〕
[45] 上同、370 頁

未来の事実に関する客観的な判断と、未来の事実に対するこうあってほしいという希望とは、別の二つのことです。（……）ところが、病院を離れて医局で、戦局、戦争について話すと、多くの医者は希望と現実を混同するんです。（……）希望と現実とは区別しなくっちゃあしょうがない。そうでなけりゃ思考力の喪失だ。なぜ医者は、病室にいるときは思考力があって、病室を一歩出ると思考力がたちまち消えてしまって（……）どうして小児的になるのかということは非常に大事なことです[46]。

・加藤はどう答えたのか？

e.g.,「斎藤茂吉の世界」…実験室では合理的思考をすることができる人物が専門領域の外に出ると、「権威に盲従し、自己の経験を足場として合理的思考に徹することがなかった[47]」理由について

① 医学研究者、臨床研究者は治療をする際、社会的原因を追求することを目的としないから

② 出身地（山形県金瓶村）と東京との不均衡を超越する大日本帝国・天皇[48]

※思想の二重性…「うち」と「そと」にも通じる

→思想と行動を一貫させることはできるのかは、現在でも

第 5 パラグラフ（旧版 205-206 頁、改版 232-233 頁）

> 「もういいだろう」と誰かがいい、私は口をつぐんだ。そういった人は、局方アルコホールと砂糖水をまぜてつくった「酒」を呑みながら、だまって私たちのやりとりを聞いていたのである。私はどうしてこうも急にからむ気になったのかと、我ながら不思議に思い、しかし確かに、その若い医者に対してではなく、実は他の何ものかに対して興奮していた。要するに私は状況が、当方の思惑や感情とは関係なく、発展するだろう、といっていたにすぎないが、そんなことでみずから興奮するはずはなかった。おそらく私は島に送られた青年たちが殺されることを考え、戦争をあらためて呪い、戦争宣伝とそれを受け入れた社会に怒っていたのであろう。私自身は医局で――つまり安全なところで、働いていて、しかもそのことに一種のうしろめたさを感じていた。それだけ私の怒りは激しくならざるをえなかったのかもしれない。

① 「当時」の加藤周一

● 当時（1943-45）、雑誌に発表した著作は、ごく少数に限られる

「詩「妹に　2 編」」『向陵時報』1943 年 11 月 10 日号（1943）

「戯曲「トリスタンとイズーとマルク王との一幕」」『向陵時報』1944 年 5 月 31 日号（1945）

→「王」の寛大な振る舞いに左右されるジャーナリズムへの批判？

・しかし、加藤の同級生、マチネ・ポエティックの同人が徴用[49]される中で、「医局＝安全なところ」にいることに、後ろめたさを感じていた？

---

[46] 加藤周一『20 世紀の自画像』筑摩書房（2005）35-36 頁

[47] 加藤周一「斎藤茂吉の世界」『近代の詩人 3』潮出版社（1993）〔鷲巣力編『加藤周一著作集 17　日本の詩歌・日本の文体』平凡社（1996）、222 頁〕

[48] 上同、255-256 頁

[49] 同時代の加藤と親交のあった人物の中で軍隊に徴兵・徴用されたのは、白井健三郎、中西哲吉、山崎剛太郎、立石龍彦、山本進、川崎和雄が確認できる。

② 執筆当時（1967 年）の加藤周一

・なぜ、「戦争をあらためて呪い、戦争宣伝とそれを受け入れた社会に怒っ」たのか？

→医局（＝安全なところ）で働いたことにうしろめたさを感じていたから

● 戦没学徒への思いが関わる

e.g., 『きけわだつみのこえ』の書評[50]

> わたくしが彼等の一人でなかったのは紙一重の偶然にすぎない。（……）殺された、そして大部分は手紙も日記も書き残すことができずにきえてしまった日本の青年の堪えてきた別れの悲しみ、軍隊の不正への怒り、生命を愛する心の激しさと、生命を奪うものへの憎しみの炎は、ここにあつめられた手紙のなかに直接の表現をみいだしている。(……) わたくしは、日本の学生達が死地に赴いたのは、(……) 単に聖戦というような空虚な標語が彼らを動かしたのではなく、倫理的な力が彼らを動かしたのだと思う。勇気、自己犠牲、克己の精神……よく戦った兵士は、りっぱな人間であった。しかし、そのようなりっぱさ、個人的、倫理的精神の強さは、戦争という社会的な現象の本質をみきわめるためには役立たなかったのである。

→自身の戦時中での生死が偶然の産物に過ぎないという前提のもと、個人的な倫理的精神だけでは、戦争を見極めるに至らなかったことへの問題視

→『ある晴れた日に』（初出 1949 年 4 月 1 日）でのやんわりとしたやり取りを激しい口調に変えたのも、彼と同世代の若者を戦争へ駆り立てたことへの怒り、批判のため？

● 「もういいだろう」で突如、打ち切られる…（『ある晴れた日に』では空襲警報[51]）

③ 現在の我々からの視点

● 反省としての学生への提言

e.g., 『わだつみ不戦の誓い』（1994）

・戦時中の人々が、大勢順応主義に陥り少数意見が生き延びなかったこと、海外からの情報が封鎖されていたことから、大勢順応主義から離れること、外国の事情を知ること、孤立しないことを学生に提言[52]

→加藤の「生き方」とも共通

→サバイバル・コンプレックス[53]とともに、どのように生きるのかという方針にもかかわった？

---

[50] 加藤周一「きけわだつみのこえ」『報知新聞』1949 年 11 月 10 日〔『わだつみのこえに応える：日本の良心』東大協同組合出版部（1950）86 頁〕

[51] 加藤周一『ある晴れた日に』月曜書房（1950）〔『加藤周一著作集 13』平凡社（1979）106 頁〕

[52] 加藤周一「「学徒出陣」五〇年と日本の現状」『わだつみ不戦の誓い』岩波書店（岩波ブックレット）（1994）27-33 頁

[53] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」になったのか』岩波書店（2018）256 頁